

令和元年度第1回三条市教育事務点検評価委員会会議録

- 1 開会宣言 令和元年7月2日（火）午後1時30分
- 2 場 所 三条市役所栄庁舎応接室
- 3 出席者 雲尾委員、岡田委員、高橋委員
- 4 説明のための出席者
長谷川教育長、遠藤教育部長、村上教育総務課長、栗林子育て支援課長、
高橋小中一貫教育推進課長、捧教育センター長、恋塚生涯学習課長、
大谷教育総務課課長補佐、西澤教育総務課庶務係長
- 5 傍聴人 0人
- 6 会議次第
 - (1) 開会
 - (2) 教育長挨拶
 - (3) 自己紹介
 - (4) 委員長の互選
 - (5) 職務代理者の指名
 - (6) 議事
 - ア 教育に関する事務の点検及び評価について
 - イ 平成30年度教育に関する事務の事後評価シートについて
 - (7) 次回教育事務点検評価委員会の日程について
 - (8) 閉会
- 7 会議の経過及び結果
 - (4) 委員長の互選
(村上教育総務課長)
委員長は、三条市教育事務点検評価委員会要綱第5条の規定により、委員の互選により定めることとされております。
適任の方がいらっしゃいましたら御推薦をお願いいたします。
(岡田委員)
雲尾先生にお願いしてはどうでしょうか。
(村上教育総務課長)
今ほど雲尾委員を推薦する声がありましたが、委員長として雲尾委員に決定することに御異議ございませんでしょうか。

御異議がありませんので、委員長は雲尾委員に決定いたしました。

これ以降の進行につきましては、雲尾委員長からお願いいたします。

(5) 職務代理者の指名

(雲尾委員長)

それでは、次の次第でございます。職務代理者の指名でございます。要綱の第5条第3項で委員長があらかじめ指名することとなっておりますので、私から指名させていただきます。

職務代理委員は、岡田委員にお願いしたいと思います。

〔岡田委員同意により、岡田委員に決定〕

(6) 議事

ア 教育に関する事務の点検及び評価について

- ・村上教育総務課長が説明

イ 平成30年度教育に関する事務の事後評価シートについて

- ・小中一貫教育推進課所管分について、高橋小中一貫教育推進課長、捧教育センター長が説明

(雲尾委員長)

小中一貫教育推進課所管分の10項目について、御質問、御意見等ありましたらお願いいたします。まず、「1-(1)学校運営改善システムの構築」につきましていかがでしょうか。

(岡田委員)

第二指標の評価で、校務支援システムの動作環境が遅いという件は改善されたということなのですが、1ページの「総合評価」の最後の辺りに、「3月の年度末更新作業の質問は依然として多く、今後の改善が必要と考える」ということは、動作環境のほかはまだ何か教職員の方々が使いにくいところがあるのではないかと思うのですが、この「質問が依然として多く」というのはどういうことなのか、具体的に知りたいです。

(高橋小中一貫教育推進課長)

年間を通しての質問は大分減ってきており、動作環境も改善されてきております。ただ、3月という年度末の非常に多くの事務処理をしなければならない時期になるとなぜ動作環境が遅くなるのかまだ不明なところがあり、そういったところを業者と話を詰めているところです。動作環境が遅くなると、この環境でどのように作業を進めたらいいのか、もう少し早くなる方法はないのかという質問が業者の方にも寄せられるということござ

います。パソコン内部の記憶をする部分を早く整理できるように業者の方で改善をしておりますが、やはり年度末になると動作が遅くなるというところで質問が多くなるというところでは、学校にはその部分で少し負担をかけているというところが反省です。

(岡田委員)

一番忙しい時期にシステムがスムーズに動作すればすごく楽ですよ。年度末の処理がよりしやすくなるというような感じで書かれた方がよいのかなと思うのですが。

(雲尾委員長)

質問が多いというよりは、年度末の更新作業時の動作速度が落ちる点は、改善されていないということですかね。

(高橋小中一貫教育推進課長)

大分改善はされたのですが、一部の学校、それも固定ではないのですが、改善されていない学校があります。これが原因の分からないところでもあります。

(雲尾委員長)

完全改修には至っていないということですね。

(高橋小中一貫教育推進課長)

そういうことです。

(雲尾委員長)

そのように分かりやすく書いてほしいということですね。

(岡田委員)

そうです。

(雲尾委員長)

「質問」とだけ書かれてあると分からないので、そこを分かるようにしていただきたいということです。

それから、その段落の最初のところで、「また、校務支援システムは導入から4年、本格運用から3年目となり」ということですが、4年経って5年目なのか、4年目なのか分かりにくいのですが。確認しておいてください。

あと、「今後の方針」のところの1段落目の内容ですが、1-(1)ではオーダーメイド訪問のことはどこにも触れていないわけです。1-(3)のところではオーダーメイド訪問が出てくるわけですが、ここでオーダーメイド訪問が出てくるためには、これが第一指標などとの関連性がどうあるかということが少し分かりにくいので、ここに書くならばそういった形で、このところにこれが貢献しているということが分かりやすくなるような、もう少しリード文を入れていただいて、オーダーメイド訪問等がそれに貢献しているといったようなことにしていただかないと、これが書かれている理由がよく分か

らなくなりますので、お願いできますか。

(高橋小中一貫教育推進課長)

成果指標との関連の中で、読み解けるような形で表現を直します。

(雲尾委員長)

そのほかよろしいですか。

では「(2) 開かれた学校づくり」、3、4ページを御覧ください。こちらにつきましていかがでしょうか。

(岡田委員)

第一指標の指標説明の最後のところ「各学園3回で市全体では27回、平成30年度に54回(各学園6回)」となっているのですが、この「各学園3回」と「各学園6回」というのは、別のものなのでしょうか。よく分からなかったのですが。

(捧教育センター長)

発行回数は各学園3回、市全体で27回。各学園においてはということでありましてけれども、平成30年度には54回、各学園6回以上を上回る。3回以上の学園が増えるということの意味していることになるのですが、そういう意味では各学園3回をクリアしているということと、それを上回る回数を重ねている学園があるということになります。

(雲尾委員長)

平成30年度に54回を目標にしているのはそうなのですが、その前の「各学園3回で市全体では27回」が平成27年度のことを指しているのか、それともただの説明文なのか全く読み取れないということなのです。これは何のために書いているのでしょうか。

(捧教育センター長)

まず、平成27年度のスタートの段階での指標、目標値ということでありまして、そこから年度ごとに上がって行って、平成30年度は54回という目標を設定したということでございます。

(岡田委員)

この「各学園3回で市全体では27回」というのは、目標ではないわけですね。

(捧教育センター長)

そうです。平成27年度で設定したものになります。

(岡田委員)

カットするとだめなのでしょうか。

(雲尾委員長)

「平成27年度は設定し」と書くか、取ってしまうか、どちらかですね。

このままだと何のために書いてあるのか分からないので。

(岡田委員)

そうすると、各学園6回を目標にしているのですが、6回を上回った学園は案外少ないということですね。

(捧教育センター長)

そうです。学園として3回が目安であって、それが30年度までには54回を上回るという目標になっています。

(雲尾委員長)

下に書いてある指標から言うと、3学園は上回って、6学園は下回っているということになるので。

(岡田委員)

全体で足し算すると上回っているようには見えるのですが、そのこともきちんと書いておかないと、数字のマジックみたいになってしまっているのです。

教育委員会として3回発行すればいいですよと話をしていたのか、それとも6回目標ですよと言っていて、それで3回だったのかでは、大分意識が変わると思うのですが、どういお話だったのでしょうか。

(高橋小中一貫教育推進課長)

確認したいと思います。

(雲尾委員長)

もし、各学園6回という目標値であるならば、達成率は33%に落ちてしまうわけです。9分の3しか達成していないわけですから。これが各学園6回平均として、トータルを54回にすればここにあるように目標達成率107%になるわけで、その目標値を各学園6回に置いたのか、6回平均に置いたのか。各学校には6回以上出してくださいねと言っているのか、最低3回出してくださいねと言っているのか。どういう設定をしているのかというところが、この第一指標の指標説明と、指標に対する評価とで読み取れないということになりますので、ここを確認してからお願いしたいと思います。

そのほか、ありますでしょうか。

それから「今後の方針」の「今後の推進方法」で、「コミュニティ・スクールの導入を市内全学校に拡大する」のところで、「研修会等で発信するとともに、導入の意志を示している学校・学園には・・・説明する等、積極的に支援を行っていく」。研修会は、一般に教職員対象ですし、学校・学園も当然学校側ですので、結局市民に対する広報はされていないということですか。

(捧教育センター長)

研修会については、教職員だけではなく、保護者や地域の方へ向けても行っているところ

ろでございます。

(雲尾委員長)

広報紙等には出しているのですか。

(捧教育センター長)

広報紙等には出していないです。ただ、案内として各学校のPTAそれから地域学校評議員など地域の方々に対して案内を出しています。また、リーフレットは全戸配布しているところでございます。

(雲尾委員長)

「今後の推進方法」のこの3行だけを読むと、どうしてもコミュニティ・スクールを展開するのに学校にしか説明していないように見えます。コミュニティ・スクールを立ち上げるために保護者や地域へどう広報しているのかということがやはり、それは学校任せではなく教育委員会からも出していくことだと思うので、保護者の方々も研修会に参加しているとか、広報紙が出ているとか、そういったことも読み取れるように書いていただけるとありがたいと思います。

(捧教育センター長)

分かりました。

(岡田委員)

そうすると、総合評価のところの一番上の2行が「研修会等で発信することにより」となっているのですが、便りや回覧でというようなことを入れた方がよいのではないのでしょうか。第一指標の方で便りの発行回数を書いてありますので。

(捧教育センター長)

分かりました。

(雲尾委員長)

そのほかよろしいですか。

では「1－(3)教職員の資質や指導力の向上」につきまして、いかがでしょうか。

(岡田委員)

第二指標の評価なのですが、先ほど「4校を除く全ての学校が年2回以上実施した」と訂正がありましたが、ということは反対に考えると4校は1回しか実施していないということですね。そうすると、そういう実態だということがここから読み取れなくて、1回しか実施していないということは、それだけ大変なのか、理由があるのか、どういうことだったのかなと思うのですが。4校というのはそんなに少なくないですね。

そういう学校は何かの事情があるのかというところが疑問だったのですが。

(捧教育センター長)

各学校はオーダーメイド訪問を使わない形で様々な研修を行っていて、そういう意味では今回1回しかないという学校については、オーダーメイド訪問としては1回なのだけれども、ほかの研修等を行っていることは事実でございます。そういう意味では研修は一生懸命やっています。

(岡田委員)

オーダーメイドのということですね。そうすると、オーダーメイドのものを活用しないということは、やっぱり活用しにくかったのか、それとも自分たちの研修で自由にいろいろな人を呼んだりということをしたかったのか、どのようなものでしょうか。

(捧教育センター長)

今、おっしゃったようなことも含まれていると思います。それぞれの学校独自で講師を呼んで研修をしています。オーダーメイド訪問の場合は強制ではないので、絶対2回行ってくださいと言っているわけではないところでございます。相手の学校のニーズに応じてということですので、そういう意味では4校が1回実施しています。

(岡田委員)

もし使いにくいとか参加しにくいということがあれば、振り返ってみるのも一つかなと思ったのですが、そうではなくて学校独自で研修をしているということによろしいでしょうか。

(捧教育センター長)

そのように捉えております。もちろんオーダーメイド訪問も使っていただければ本当は有り難いです。

(雲尾委員長)

「学園の場合は各小中として」とあるのはどういう意味ですか。第二指標の「指標に対する評価」、その「年2回以上実施した」の後です。

(捧教育センター長)

各校で実施するのですが、学園の場合はそれぞれの学園で実施しているところもあります。四つ葉学園の研修とか、おおじま学園の研修という形で実施しているのですが、会場が大島中とか、あるいは本成寺中といったように。このカウントの仕方としては、その学校の回数でカウントしているので、そういう意味になります。各小中の、オーダーメイド訪問としてその学校に行ったということです。

(雲尾委員長)

大島中で実施しているところに、大島小と、須頃小がやって来た。これは、おおじま学園で行っていますね。3校で実施していますよね。この場合はどう数えるのですか。

(捧教育センター長)

それは一つと数えています。

(雲尾委員長)

一つというのは、どれにとっての一つですか。

(捧教育センター長)

オーダーメイド訪問で行った学校ということで。

(雲尾委員長)

行った学校は大島中学校だから、大島中学校だけのカウントになって、そこに参加した大島小と、須頃小はカウントされないという意味ですか。

(捧教育センター長)

今のところはカウントしていません。

(雲尾委員長)

研修に参加はしているけれど、自分の学校で開催していないからカウントはされないということですか。

(捧教育センター長)

そのような形でこの回数については出したところです。

(雲尾委員長)

「各小中として」というのはどういう意味ですか。小と中は別々にカウントしているという意味にならないですか。

(高橋小中一貫教育推進課長)

「学園の場合は各小中として」という表現が適切な読み取りができない状況であります。今ほどセンター長が申し上げましたとおり、会場校を1カウントというふうにしておりますので、そのような形でカウントをこれまでもしてまいりました。ここの表現を少し変えたいと考えております。

(雲尾委員長)

分かりました。では、カットするなり別な説明を入れるなりということでお願いします。

そのほか、「今後の方針」の5ページの一番下の「オーダーメイド訪問の要請数の増加には限界があるので」とありますが、要請数の増加は限界がないですね。要請する方は幾らでも要請できるので、限界があるのは応える方ですね。

(捧教育センター長)

「要請数に応えるには限界がある」という言い方で。

(雲尾委員長)

そのほかよろしいですか。

では「1— (4) 確かな学力の育成」につきまして、いかがでしょうか。

「施策の基本方針」では「学園ごとにその結果を活用し」とあるのですが、「今後の方針」の中では学園ごとの記述がなく、「中学校では」とあるのですが、小中一貫教育を生かして育成していくようなことが読み取れないのですが、いかがでしょうか。

(捧教育センター長)

この指標からするとそのような表現の仕方になってしまっているのかなと思います。小中一貫教育を生かした部分で、今後の推進についても取り組めることはありますので、そういうことを踏まえて検討したいと思います。

(雲尾委員長)

そのほかよろしいですか。

それでは「1－(5)豊かな心を育む心の教育と体験活動の充実」につきまして、いかがでしょうか。

(岡田委員)

去年もお伺いしたのですが、いじめや不登校などの数値的なものは減っているのでしょうか。

(高橋小中一貫教育推進課長)

残念ながらいじめ認知件数につきましては、いじめ防止対策推進法が施行されて以来、三条市としては疑わしいものは全ていじめとして対応するという考えで考えておりまして、それ以来いじめ認知件数は大きく増加しております。また、それに対応するしっかりとした早期発見、早期対応も徹底しているところでもあります。いずれにしても、大きな問題になることはなく、しっかりと保護者とも情報共有しながら適切な対応に努めているところでもあります。

不登校発生率につきましても、同じように近年増加傾向にあります。昨年度の例で申しますと、中学校は発生率が低くなりました。小中一貫教育のお陰で中1ギャップは極めて解消傾向にありますが、近年は小学校における不登校の発生率が増えてきているところが課題となっているところでもあります。

(岡田委員)

ありがとうございました。

(雲尾委員長)

「指標に対する評価」のところで、第一指標は「初めて目標を達成することができた」と書いてあるわけですが、第二指標の方は、前年比や全国平均との比較は書いていますが、結局目標値にはわずかに足りなかったこと自体は書いていないのですよね。目標値に達しなかったことを明記していただくことが第二指標では必要かと思います。

そして、9ページの「今後の方針」の最後ですが、「子どもの学びやスキル、自己有用

感などの社会性は体験活動の振り返りを通して深まるものであることから、振り返り活動を充実させるとともに、学びやスキル、社会性が定着するよう、事後活動を充実させることを各校に指導する」といったところで、結局振り返り活動と事後活動は別のことになりますよね。「振り返り活動を充実させるとともに」「事後活動を充実させる」だから、別なことになってしまっていて、ここの文章が二重三重に同じことを書いているような気がするのですが。

(高橋小中一貫教育推進課長)

振り返り活動につきましては、それぞれの活動が終わった後の評価アンケート等を活用した形での振り返り活動が中心になるのですが、その中から更に課題を発見して、ソーシャルスキルトレーニングを取り入れたり、また別の形での体験活動を取り入れる事後活動を補充、充実させていくという意味合いでありますので、少し表現を変えて記載させていただきます。

(雲尾委員長)

個々の振り返り活動を充実させて、全体の事後活動を充実させるということですね。

同じような表現が続きますので、そこを整理していただきたいと思います。

そのほかよろしいですか。

それでは「1－(6) 健やかな体を育む健康教育、体力向上の取組の推進」につきまして、いかがでしょうか。

(岡田委員)

第二指標の体力のことですが、これは昨年度と子どもたちが違っていますよね。そうすると比べられないと思うのですが。達成したという中に、何かこれが良かったというものは見当たらなかったのでしょうか。結果だけが指標に対する評価に記載されているのですが、それについてはどのように考えていらっしゃるのでしょうか。

(高橋小中一貫教育推進課長)

御指摘のとおり、その年度ごとの小5、中2の男女でありますので、子どもたちは変わっております。その学年のカラーが毎年ありますので、体力に若干弱点のある学年の子どもたち、得意な学年の子どもたちとそれぞれあるわけですが、昨年度のうちにそれぞれの弱点項目が出ておりますので、「今後の方針」それから「総合評価」のところでも若干触れさせていただいているのですが、1学校1取組の中でその当該学年の弱点について各学校に指導しながら体力向上に努めているというところがございますので、その弱点克服のための1学校1取組の成果という表現を少し入れながら目標達成という形で表現を加えさせていただきたいと思います。

(雲尾委員長)

この第二指標の「指標に対する評価」の中で、「32 種目中 16 種目のみが」とありますが、ここはもう「のみ」ではないですよ。「のみ」はいらないですよ。

その後の「13 種目の計 8 項目」「3 種目計 3 項目」の「項目」とは何ですか。

「13 種目」と「3 種目」でよいと思うのですが。「種目」と「項目」が混在しているのでは。

(高橋小中一貫教育推進課長)

例えば握力や上体起こし、50 メートル走というものが項目でして、5 年生男子の握力というものを種目という形で考えて記載しております。そのために表現が分かりにくくなっているかなと思います。

(雲尾委員長)

中 2 男子何種目、中 2 女子何種目などの方が分かりやすいのではないですか。男子と女子を合わせて種目にしてしまうから 13 種目になるわけですよ。それで計 8 項目と生じるけれども、これを中 2 男子で 8 種目のうち何種目か、要するに、みんな 8 種目はあるわけだから、それぞれの学年別、男女別の 4 つの中での種目の合計ですよ、16 種目というのは。

(高橋小中一貫教育推進課長)

そうです。

(雲尾委員長)

その方がむしろ分かりやすいのではないかと思います、いかがでしょうか。

(高橋小中一貫教育推進課長)

表現としては中 2 男子何種目、それとも中 2 男子といった場合はもう何項目とした方がよろしいでしょうか。

(雲尾委員長)

合計 32 項目で。

(高橋小中一貫教育推進課長)

8 項目掛ける 2 掛ける 2 になっていますので。

中 2 男子何項目、中 2 女子何項目、計何種目という言い方でもよいのかもしれないです。

(雲尾委員長)

中 2 男子、中 2 女子、小 5 男子、小 5 女子のそれぞれの達成項目数、達成種目数とイコールなのだけれど。結局種目数と項目数はその場合一致しますものね。

(高橋小中一貫教育推進課長)

はい。では再度、記載の仕方を提案させていただきます。

(岡田委員)

第一指標の「指標に対する評価」の最後の文章「一人でつくり片付けまでできた子どもは全体の34%おり」と具体的な数字が挙がっているのですが、この具体的な数字はどのような数字なのか説明があるとよいと思います。今までよりもずっと上がってきているという数字なのか。そうだと思って読んでいるのですが。

(高橋小中一貫教育推進課長)

食育というものに対する興味関心というところからの表現を付け加えさせていただいたところではありますが、このアンケートそのものについては、指標としては本来、教員の評価アンケートですので、子どもたちの評価アンケートではないところがありますので、子どもの評価アンケートの数字をそこに盛り込ませているので、入れ込み方としては適切ではない部分があるのかもしれないと思っております。

(雲尾委員長)

この34%というのは、比較対象がないので高いのか、低いのかは分からないということですね。

(高橋小中一貫教育推進課長)

はい。ただ、3人に1人が最後までやり遂げることができたということが、私たちの評価ということではあるのですが、比較対象がないということになります。

(雲尾委員長)

以前に比べてどうということではなく、とりあえず3分の1いるから高いのではないかという。

(岡田委員)

そうすると、明確な数値がないので、育ってきていると考えているみたいな感じなのかと思います。

(雲尾委員長)

そのほかよろしいですか。

それでは「2-(1) ICT、グローバル化に対応した教育の推進」について、いかがでしょうか。

第二指標の「主な構成事務事業」に入っている「ALT等の業務委託」なのですが、「ALTや地域在住の外国人を指導者として市内小中学校へ派遣し」ということは、地域在住の外国人はALTではないということで、ALT「等」の、「等」に入るということですか。

(高橋小中一貫教育推進課長)

ALTとは区別していて、ALT「等」の方に入ります。

(雲尾委員長)

それはどういう形で活動されているのですか。

(高橋小中一貫教育推進課長)

外国語指導補助者ということで3名の方をお願いをしております、この3名の方々が入ることによって、基本的に全ての学校に満遍なく平準化をして補助員が入っているという形になります。ALT につきましては、インタラックという業者への業務委託によって3名を配置しています。

(雲尾委員長)

必要な存在ということですね。

(高橋小中一貫教育推進課長)

はい。

(岡田委員)

13ページの「今後の方針」の一番下がよく読み取れなかったのですが、「また、学園全体で外国語指導に注力するよう、小中学校のより強い連携を働きかける」ということですが、先ほどの説明だとこれが反対だったような気がするのですが。

(高橋小中一貫教育推進課長)

私の表現の方法が前後逆になってしまったような感じがいたします。今現在、新学習指導要領全面実施に向けて英語専科教員の加配教員が配置されまして、中学校教員が小学校に配置されて、小学校の英語力を指導するという形での、まさに小中一貫教育の部分での外国語教育が進んでいるところであります。

また、加配教員が配置されていない学園においても、各学園における中学校教員が小学校教員に対して、研修会で外国語活動に対する内容についてコンサルテーションしていくという部分もございますので、そういう意味での小中学校のより強い連携と書き方をさせていただいたところであります。

(岡田委員)

学園内の小中の連携をより密にすることで、英語というか外国語指導がよりアップすると考えていらっしゃるということでもよろしいでしょうか。

(高橋小中一貫教育推進課長)

そのように考えております。

(岡田委員)

小中連携が目標ではないわけですね。

(高橋小中一貫教育推進課長)

そうです。

(雲尾委員長)

そのほかよろしいですか。

それでは「2－(2) 市民性を高める教育の推進」につきましていかがでしょうか。

(岡田委員)

気になったのが、「今後の方針」の一番下の「参加者を増やすことにより、科学教育に関する児童生徒の興味・関心を高めていく」ということなのですが、これも興味関心というか、「総合評価」に書いてある、活動内容に満足している参加者が多いということは活動内容はしっかりしているから、あとは参加さえすれば興味関心が高まっていくという捉え方でよいのか、それともやはり今後も興味関心を高めていくように内容等の充実も図っていくということも入っているのか。参加者の数ということにこだわっているような気がするのですがいかがでしょうか。

(捧教育センター長)

科学教育の推進は、評価としては本当に満足のいく、参加した子どもたちがすごく満足しているものですから、それにも関わらず子どもの数が減ってきているというところから、このような表現になっているところでもあります。参加してもらえればその良さがすごく分かるのという思いの部分になっているのです。ただ、もちろん内容の充実を図っていくことも常に大事なことだと思いますので、そのこともまた「今後の推進方法」の中に入れ込んでいきたいと今の話を受けて思ったところです。

(岡田委員)

参加した子どもたちがとても充実して満足しているという、その子どもたちの声みたいなものがどこかに載っていれば、子ども同士でなるほどという感じで、内容を充実という面プラス広報というか、声掛けというような感じで進めるとよいのかなと思いました。

(雲尾委員長)

その参加者でいうと、総合評価では「複式学級の児童が参加しなかった等の理由で」とあるわけですが、複式学級の児童がそもそもそんなに数が多くないので、これが前面に出てきても数が多くなかったことの理由の説明には余りならないかと。

「今後の方針」のところ、その最後は「参加者を増やすことにより～興味・関心を高めていく」なのだけれど、その前の文章が「市内教職員による支援スタッフが増えるように働きかけること」と、まず支援スタッフを増やす、そうしたら教職員から声を掛けてもらって、そして児童生徒の参加者が増えるという、非常に回りくどい形になっているのですが。そうすると、結局、教職員の支援スタッフを増やすのは、児童生徒の参加者を増やすためみたいに読み取れるのですが、教職員は参加しなくてもいいから声を掛けたりしてとか、これ、何のために支援スタッフを増やすのかも分からないですね。何かすごく回りくどいのがずっと続いていて。

(捧教育センター長)

文言を考えたいと思います。スタッフとして参加している先生の学校の子どもたちが参加してくれるという実際の現場の状況なのです。ですので、教職員が増えることでまた子どもたちも一緒に付いて来てくれるだろうということでこのような表現になっているところでは。

(雲尾委員長)

参加するスタッフにしたら、子どもの数を増やすために、あなたも来てと言われているような形になりますよね。

(捧教育センター長)

文言を変えたいと思います。

それから複式学級について、それは刃物・ものづくり教育のことで、科学教育とは異なるので、大きな影響とは考えられないということであれば、そこもカットということでもよろしいですか。

(雲尾委員長)

お願いします。そのほかよろしいですか。

では「2－(3) 社会で自立するための特別支援教育の充実」につきまして、いかがでしょうか。

(岡田委員)

「総合評価」ですけれども、特別支援教員指導員を増やしたということ、枠を増やしたのですが、定員に達しない状況が続いているということなのですが、この 65 人はやはり必要なわけですよね。65 人そろえばもっと高い、合理的配慮が可能になると考えていらっしゃる。それで、65 人が今足りていないのか。今の状況が知りたいです。

(高橋小中一貫教育推進課長)

30 年度においては 65 人中 60 人まで、年度当初で出入りがありますので、最大 60 人まで配置することができました。今現在は大変有り難いことに 65 人配置することができているという状況でありまして、非常に各学校も助かっているところであります。

(岡田委員)

ちょっと安心しました。

(雲尾委員長)

そうすると、「定員に達しない状況が続いたが」を、「年度末でも 60 名の配置にとどまるが」くらいの表現にさせていただいた方が、少なくとも 51 人を超えているということを示していただかないと、要するに一般任用職員からパートタイム職員にして、条件が悪化したので誰も来てくれないのだと読み取れてしまいますよね。前の 51 人を、少なくとも上回って配置できたということが効果だということを表現しないとマイナスに取られ

てしまいますので、その人数を加えていただきたいと思います。

そのほかよろしいですか。

では「2－(4) 学校外における学びの機会の充実」について、いかがでしょうか。

(岡田委員)

「総合評価」に書いてある、「日曜の受講生は、少人数指導となり」とありますが、今までは少人数指導ではなくどのような形だったのかということが一つ、それから、第二指標で、日曜日には「参加者を少し増やすことができた」と書いてあるのですが、その現状が見えてこないなので、お願いします。

(捧教育センター長)

まず日曜マルシェですが、委託業者が30年度変わりました、家庭教師のトライになりました。家庭教師のトライは少人数指導を得意としているというか、それがコンセプトでありまして、それまでの能開センターがやっている教室の枠組みの人数とは違った少人数の枠組みでやっていただいたということでございます。

(岡田委員)

そうすると「少人数指導となり」というのは、少なくなって少人数指導になったわけではなくて、指導体制を変更したということですね。

(捧教育センター長)

はい。

(岡田委員)

ということは、少し増えたのだけれど、それでも少人数指導ができているという捉えでよいのでしょうか。

(雲尾委員長)

少人数指導形式ということですね。人数が少人数になったのではなくて、少人数指導方針とか、形態とか、ということですよ。

(捧教育センター長)

そうです。トライがやっているのは4人から6人とか、そういう人数の少ない単位で対応する仕組みになります。

(雲尾委員長)

ただ単に「少人数指導」となると、人数が減ったかのように受け取れるのでということですね。「日曜の受講生は、委託業者の変更によって少人数指導方式となり」ということですね。

(捧教育センター長)

はい。そして、その無料体験教室というのは、委託業者が変わったことで募集の時期が

遅かったのですが、遅かったことによって、前の年よりも応募者が減ったので、そこで無料体験教室を行って、そういう工夫をすることで少しでも参加者を増やそうということで努力した結果、若干増やすことができたということを述べています。

(雲尾委員長)

「今後の推進方法」のところに、その事情が少し書いてありますね。これ、何年間契約とかはあるのですか。

(捧教育センター長)

毎年確認する仕様になっています。

(雲尾委員長)

今後もそういうことが起こり得るということで、ということですね。分かりました。

・生涯学習課の所管分について、恋塚生涯学習課長が説明

(雲尾委員長)

では、生涯学習課所管分につきまして御意見や御質問がありましたらお願いいたします。まず3-(1)21、22ページです。よろしいでしょうか。

では、23、24ページの、「3-(2)魅力ある多様な学習活動の充実」についていかがでしょうか。

(岡田委員)

第一指標の、きっかけの一步事業のことなのですが、「指標に対する評価」の文章で「参加者への「声掛け」を行い、次のステージとなるセカンドライフ応援ステーションへ83人の」と、このセカンドライフ応援ステーションというのが、前も聞いた覚えがあるのですが、これは何かボランティアのできそうな人を登録しておく場所ということでしたでしょうか。

(恋塚生涯学習課長)

生涯学習課で行っているきっかけの一步事業に参加された方の中で、今度は自分もそのお手伝いができるという人が現れてきているわけで、そういった方々に、セカンドライフ応援ステーションに行けば、ボランティアをしてくれないかという声掛けも来るので、登録していただだけませんかという形で送り込んだ方が八十数名ということになります。

(岡田委員)

その中から声を掛けて、ボランティアに来てもらって、511人のボランティア活動につなげられたと、そういう意味ですね。

(恋塚生涯学習課長)

そのとおりです。

(雲尾委員長)

ここはあくまで、その第一指標はきっかけの一步事業の延べ参加者数なので、ある意味書き過ぎといえれば書き過ぎで、「総合評価」にもそれは書かれていることなので、「総合評価」としてはよいのですが、「指標に対する評価」としては、逆に言うと短過ぎて「きっかけの一步事業については 50 事業を開催し、延べ 5,658 人の参加があった」というだけの話なので、目標値に対して達成したとかそういったものは、本来ここに書かれる評価ですよ。

つまり、目標値を達成したというのは、50 事業を開催した、事業数が例えば増えたからなのかとか。50 事業というのは、そもそもこれが前年度に比べてどうなのかは分からないので、45 事業を 50 事業にしたからこのように参加者が増えたのかとか、あるいは 60 事業を 50 事業に絞ったけれど、それぞれの事業が増えたからこうなかったのかとか、そういった経緯が分からないままこちらの方が書いてあるので、まずはその 50 事業、5,658 人のところをきちんと指標に対する評価として書いていただきたいということがありますので、それを書いていただいた上でこの部分を書くか、それとも総合評価だけにするか御検討いただきたいなと思います。

(恋塚生涯学習課長)

分かりました。

(雲尾委員長)

「今後の推進方法」に出てくる「高齢者 100 人インタビュー」というのは何ですか。

(恋塚生涯学習課長)

これは、去年初めて産官連携で行ったのですが、特にまちなかの高齢者に絞りまして、市の職員が話を聴くのではなく、民間の方が代わりに直接お宅に訪問し、今何に興味がありますとか生活の話をお聴くようなことを行いました。実際、市の職員は基本的に 60 歳以下なので、本当にそういった方々の考えを分かっているのかなというところがきっかけで、それだったら直接聴いた方がよいのではないかということで始めた取組であります。そこで出てきたいろいろなアイデアを事業に結びつけていこうということです。

(雲尾委員長)

つまり、一般の人ということですね。一般高齢者ですね。

(恋塚生涯学習課長)

そうです。

(雲尾委員長)

この生涯学習課のところで、高齢者 100 人インタビューとくると、参加者の中から聴いているようにも受け取れるのですよね。参加されている方だと、ある程度そういう活動に

特化してしまっているのです、要するに偏った市民になるので、そういう偏った市民ではなく、一般の方ということですよね。

(恋塚生涯学習課長)

はい。

おっしゃったように、高齢者 100 人インタビューと書くと、どうしても生涯学習課のこの事業に来られた、どちらかという意識の高い人にインタビューしたのかと誤解される可能性もありますので、今言われたように、一般の人 100 人に聴いたというような要素を盛り込みたいと思います。

(雲尾委員長)

お願いします。そのほかはよろしいですか。

では「3－(3) 生涯学習支援体制の整備」について、いかがでしょうか。

(岡田委員)

25 ページの「今後の推進方法」の最後、「セカステボランティアへの」、これはさっきの、セカンドライフ応援ステーションのことですか。

(恋塚生涯学習課長)

言葉を違うように書いてしまっていますけれど、同じでございます。修正させていただきます。

(雲尾委員長)

「今後の推進方法」の 1 文目、「市民の様々な学習活動が円滑に行われ、自立した学習活動ができるようニーズに合わせた生涯学習支援体制の充実を図る」というのがいかにも行政的で、何をすることが具体的にさっぱり分からない文章なのですね。生涯学習支援体制の整備、という中で言うと、何でしょうか。もう少し具体性を持たせていただけると有り難いのですけれど、何か検討していただけますか。

(恋塚生涯学習課長)

分かりました。

(雲尾委員長)

そのほかよろしいでしょうか。

6－(1) ですね。35、36 ページになりますが、ここはいかがでしょう。

第一指標の「指標に対する評価」の文章で、結局これは令和元年度にはできるけれど、平成 30 年度にはできていなかったということが抜けていますので、手続について調整を進めたが、目標は達成できなかったと。しかし、令和元年度以降にする予定となっているといった形で、評価ですのでできなかったということは書いていただきたいと思います。

そのほかよろしいでしょうか。

では「6－（2）埋蔵文化財の調査・保護」につきましては、いかがでしょうか。

「6－（3）文化遺産の公開・活用」について、いかがでしょうか。よろしいですか。

・子育て支援課の所管分について、栗林子育て支援課長が説明

(雲尾委員長)

子育て支援課所管部分につきましての御質問、御意見をお受けします。

「4－（1）幼児教育内容の充実」ですね。27 ページ、28 ページについて、いかがでしょうか。

(岡田委員)

「総合評価」のところで、30 年度を「新たにスキルアップ研修を実施することにより」と書いてあるのですが、この研修はその下に書いてある 27 年度から 29 年度の養成研修を受けた人がスキルアップ研修を受けてということで理解してよいでしょうか。

(栗林子育て支援課長)

そのとおりでございます。

(岡田委員)

なぜ 27 年度から 29 年度の養成研修について書いてあるのかなど、分からなかったのですけれども、分かりました。

(雲尾委員長)

そのほかよろしいでしょうか。

では「4－（2）幼保小連携の推進」について、いかがでしょうか。

「4－（3）家庭への支援の充実」はいかがでしょう。

(岡田委員)

「総合評価」の上から、人数の合計が違っているのではないかと思います。1,834 人ではないでしょうか。その人数を見ていると、小学校の就学時健診時に実施していたり、中学校入学説明会で実施していたりということで、そういう時期に実施することによってほとんどの保護者が聞けたと、そういう工夫だということですね。

(栗林子育て支援課長)

そのとおりでございます。また、数字につきましてはどちらが間違っているのか確認させていただきたいと思います。

(雲尾委員長)

これ、小学校何校、中学校何校実施かは分かりますか。

(栗林子育て支援課長)

全体に対して募集をかけておりますけれども、基本的には全部の学校なのですけれども、

はっきりと全部だったか、何かの都合で実施がなかったところもあったかと思いますが、数字については確認させていただきたいと思います。

(雲尾委員長)

参加者数、全員が来るかどうかにもよって変わってきますので、小学校と中学校で大分差があるのは、中学校の親の参加率が低いのか、実施してないのか分からないところもありますので、その辺は、はっきりした方がよいかと思っています。

そのほかよろしいでしょうか。

・教育総務課の所管分について、村上教育総務課長が説明

(雲尾委員長)

これにつきまして御質問、御意見がありましたらお願いいたします。

ありがとうございました。

(7) 次回教育事務点検評価委員会の日程について

村上教育総務課長から提案があり、委員長が諮り次のとおり決定する。

〔日時〕 令和元年8月8日(木) 午後1時30分

〔会場〕 三条市役所栄庁舎応接室

(8) 閉会宣言 午後4時2分